

総社市秦歴史対照年表

時代	西暦	総社市秦・総社市	日本
縄文時代	二〇〇	宮川遺跡	船橋遺跡(京畿圏)
	三〇〇	赤沼遺跡 上城一宮遺跡 古沼遺跡(三重県津市出土) 大宮遺跡	野崎寺 縄文遺跡を築る(二三九) 善徳寺遺跡(京畿圏)
	三三〇	この頃、熊川で神まつりが始まる。(総社神社) この頃、庄川で神まつりが始まる。(源氏経津主神社による)	ヤマト政権日本を統一し始める
古墳時代	四〇〇		この頃、秦の始皇帝が東渡し百官東渡
	五〇〇	作山古墳 この頃、一丁地区古墳群が埋られる	埴山古墳(埴山町) 木山古墳(庄川橋下流)【大阪府】
	六〇〇	作山古墳 この頃、一丁地区古墳群が埋られる	山崎古墳(五三八)
飛鳥時代	六〇〇	金子古墳 金子古墳群古墳	聖徳太子崩御となる(五九二) 四天王寺創建(五九二)【京都府】 法興寺創建(六〇七)【奈良県】
	七〇〇	養老創建 風水古墳 上城十三古墳 熊川遺跡	衣冠の改新(六四五)
	七〇〇	この頃、熊川町下流に秦原屋敷となる。(現出の秦・唐・中国) この頃、熊川が築かれる。	吉野の四國前川に備中備後に分かれる(六八三)
奈良時代	七〇〇	佛中間分寺 同分尼寺創建	平賀宮に地蔵堂を 築く(七二二)【徳島県】
	八〇〇	佛中間分寺 同分尼寺創建	熊川古墳群から分かれる(七二二) 法興寺創建(七二二) 東大寺大仏堂が完成する(七五二) 平賀宮に地蔵堂を築く(七五二) 熊川 天宮堂が完成する(八〇五) 空襲 熊川を焼く(八二二)
	九〇〇	式部社：熊川神社 石部神社 神部神社 沼田神社 古殿神社 熊川神社 石部神社	聖徳太子完成(七二七)
平安時代	一〇〇〇	式部社：熊川神社 この頃、熊川創建 熊川神社 熊川用水を完成させる	天智天皇の崩御 平賀宮 天宮堂となる(七二七) 平賀宮(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
鎌倉時代	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
室町時代	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
安土桃山時代	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
江戸時代	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
明治時代	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)
	一〇〇〇	熊川神社 熊川用水を完成させる	熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七) 熊川神社創建(七二七)

目 次

1. 一丁垧古墳1号墳	1
2. 弓月の君率いる秦氏の謎	2
3. 麻佐岐神社	3
4. 石畳神社	4
5. 秦原廃寺	5
6. 姫社神社	6
7. 三角縁神獸鏡	7
8. 金子石塔塚古墳	8
9. 秦天神社	9
10. 秦八幡神社	10
11. 金比羅神社	11
12. 古川寺	12
13. 荒平山城跡	13
14. 「語り」備中兵乱と秦	14
15. 「秦」という地名の由来	15
16. 湛井堰十二ヶ郷用水	16
17. 茶臼嶽古墳	17
18. 風水古墳	18
19. 秦大垧古墳	19
20. 一丁垧 15 号墳	20

いちちょうぐるこふん 1 号墳
 一丁塚古墳 1 号墳



岡山県史跡指定(平成28年2月5日) 総社市史跡指定(平成23年6月23日)

1. 所在地 総社市秦 4000 番 11、4000 番 39 (いずれも地元地区有林)
2. 墳丘 前方後方墳
3. 規模 墳長 約 76 m (後方部長 37 m、前方部長 39 m)
4. 段築 なし
5. 造出 なし
6. 外表施設 葺石、埴輪
7. 主体部 竪穴式石室
8. 時期 古墳時代前期前葉 (4 世紀初頭)
9. 特徴

①足守川以西の備中で最初に築かれた大規模古墳。②後方部には 3 基の方墳が連続して築造されている。③前方後方墳としては岡山県南部では最大の規模。④前方後円墳と比較した場合、備中エリアでは 9 番目に大きい。

10. 概要

一丁塚古墳 1 号墳をはじめ、この付近には「一丁塚古墳群」として、33 基 (1 号～33 号) にも及ぶ古墳が発見され、大きな注目を浴びている。

2

「^{ゆづき}弓月の^{きみひき}君率いる^{はたし}秦氏の^{なぞ}謎」

日本書紀で伝えられるところによると、応神天皇 14 年に秦^{しん}の始皇帝の子孫である「弓月の君」が新羅の妨害にもかかわらず 120 県の民、数万人を率いて、百済から渡来してきたという。

新選姓氏録によれば、孝武王の子の功満王は仲哀天皇 8 年に渡来、その子の融通王(弓月の君)が応神天皇 14 年に渡来したとされる。日本三代実録にも同様の関連した記述がある。秦^{はたし}氏の研究で発掘された遺跡には新羅系の物が多く、日本書紀が新羅を百済と間違えたとするのが有力である。

秦氏は、土木、製鉄、養蚕、機織りの技術を持って渡来し、山城(現在の京都府)を中心に大和朝廷を支え、平安遷都にも大活躍したという。聖徳太子の知恵袋的存在であった秦氏の秦河勝は有名で、弥勒菩薩で知られている広隆寺も秦氏の氏寺で、松尾大社、大酒神社、伏見稲荷も秦氏そのものによる。

その秦氏が、この総社市秦に本当に渡来してきていたのか。秦氏は朝鮮半島辰韓(秦韓)をつくり、新羅を経て、まずは九州北部の宇佐八幡神社を拠点にしたという。そして中国地方を経て、京都まで最先端の文明を持って制覇したという。

稲荷神社、八幡神社など秦氏が全国に建立した神社は約八万社もある。現在の岡山県にも秦氏の関係しているものは極めて多数にのぼり、美作の国まで秦氏によるものと言われている。法然上人の母も秦氏であったという。県内に秦氏に關係する事物が多いからといって当地秦に秦氏が渡来して住み着いたという明確な証拠は未だないが、当地「秦」と「秦氏」の關係を推測すれば、次のとおり。

【当地「秦」と「秦氏」の關係推測(筆者)】

- I 秦氏の「氏寺」ともいわれている広隆寺の瓦文様と秦原廢寺(飛鳥時代)の瓦文様が酷似
- I 和妙抄など当地に「秦」という地名が付せられた古くからの由来
- I 古くから磐座をご神体とする麻佐岐神社と石畳神社の2つの式内社が秦に存在(磐座信仰の秦氏)
- I 技術集團の秦氏として、大陸からの銅、鉄の技術伝来の痕跡が多く存在すること(姫社神社他)
- I 渡来系の古墳築造の土木技術の現れ及び旧十二ヶ郷用水井堰技術が秦氏の京都桂川の井堰に類似
- I 八幡神社で有名な秦氏と關係深い八幡神社が秦の古墳群の集中する山の上にあった事実(現在は山の下に移築)
- I 秦上沼古墳から出土した三角縁神獸鏡は京都椿井大塚古墳から出土したものと同型

「秦原廢寺の一带は、和妙抄にいう備中国下道郡秦原郷で古代に渡来氏族の秦氏の居住地であったことは確かであろう。」「秦原廢寺も秦氏の氏寺であったと考えて間違いない。」(葉師寺慎一編書 吉備の古代史辞典)との解説もある。古代吉備の国の中心が総社市付近の「吉備路」にあるとして、さらにその原点は当地秦にあるのではないか。そして、吉備の国は、畿内と深い競争關係を構築しながら併存的に、吉備独自の文化圏が形成されたのではないか。卑弥呼東遷説、さらにはニギハヤヒ命吉備説にあるように、むしろ畿内(大和)の形成の前段階で吉備が寄与し、その文化が東遷していったという方が説得力あるのではないか。(板野 忠司)

ま さ き じ ん じ ゃ
麻佐岐神社



- | | |
|--------|---|
| 1. 鎮座地 | 総社市秦 4035 番地 |
| 2. 社 格 | 式内社 村社 |
| 3. 御祭神 | <small>いわくら おおくにぬしのみこと</small>
磐座 大国主命 |
| 4. 創 建 | 不詳 吉備国最古(大正元年の木札があり、記載内容から判断すると 377 年頃) |
| 5. 御神体 | 磐座 |
| 6. 祈 願 | 国家安泰・家内安全・五穀豊穡 |
| 7. 祭 日 | 毎年 4 月第 4 日曜日 |
| 8. 概 要 | |

当社は吉備の国最古の創建であり、鎮座地の全山を正木山と称し、山頂の磐座を霊代（ミタマシロ）としているため、本殿は無く、拝殿のみである。

また、磐座を中心として半径 50 m に磐境（神拝所）とストーンサークル（列石）がある。麻佐岐神社磐座配置図（拝殿正面左参照）

延喜式内社であり本国一宮格を定められた。また、岡山藩主池田氏においても早魃のときは祈雨の祈願所と定められ、藩主が奉幣を行った。

※式内社とは「延喜式」の第 9 巻・第 10 巻「神名帳上下」に記載されている神社のこと。

4

いわだたみじんじゃ
石畳神社



1. 鎮座地 総社市秦 3995 番地
2. 社 格 式内社 村社
3. 御祭神 いわくら ふつぬしのかみ
磐座 経津主神
4. 創 建 不詳
5. 御神体 高さ約 60 メートルの磐座
6. 祈 願 高梁川の安全
7. 祭 日 毎年 7 月第 1 日曜日
8. 概 要

石畳神社は、この磐座をヨリシロ（神霊が招き寄せられて乗り移るもの）として祭る。高梁川は古くから暴れ川として洪水、氾濫を繰り返しており、川の安全を祈願する祭典を行っている。

また、万葉集に「石畳さかしき山と知りながら我は恋しく友ならなくに」と記されている。



岡山県指定重要文化財(県指定) (昭和34年3月21日)

1. 所在地 総社市秦 2328 番 9
2. 創建 飛鳥時代 (630 年頃)
3. 伽藍 南門、中門、塔、金堂、講堂の建物が南北に一直線に存在したものの。
(四天王寺と同じ)
4. 寺域 東西 一町、南北 一町と想定されている。
5. 概要

秦原廃寺(秦原寺)跡地には、現在、塔心礎中や礎石が一同に集められているが、出土した瓦等から、飛鳥時代(630年頃)に創建された中四国最古の寺院跡とされている。

ここから出土した軒丸瓦は、二種類が確認されており、その一種類が、岡山県内で最古の飛鳥様式の八葉単弁の蓮華文の瓦で、もう一種類は、吉備式と呼ばれるものである。なお、瓦の窯跡が秦天神社の境内内で発見されている。南門の跡から出土した高野槇の柱は、「総社市埋蔵文化財学習の館」に展示。礎石は、総社市吉備路文化館ほか各地に存在。

6

ひめこそじんじゃ
姫社神社

1. 鎮座地 総社市福谷 1423 番
2. 社 格 村社
3. 御祭神 ひめこそのかみ あかるひめ
比売語曾神 (阿加流比売)
4. 創 建 不詳
5. 祭 日 毎年 10 月第 2 日曜日
6. 概 要

新羅の国から渡来してきたという新羅の王子・あめのひほこ天日矛の妻・あかるひめ阿加流比売を祭神として祀ってある。阿加流比売は比売語曾神とも呼ばれる製鉄の神。

天日矛は朝鮮半島から製鉄技術を伝承したといわれている。吉備国は製鉄王国であったことと関係があるといわれている。また、高梁川西岸・新本川流域は製鉄関連の遺跡が点在し、さらには渡来系の秦氏が治めた地。秦氏は天日矛や阿加流比売を崇拝していたという。これとも関係があるものと思われる。

製鉄技術伝承に対し、恩義から神社を建て感謝の意を表したものと思われる。

姫社神社の境内地周辺から、製鉄の痕跡として「てつさい鉄滓」も出土している。

さんかくぶちしんじゅうきょう
三角縁神獸鏡



てんのうにちげつめいさんかくぶちしんじゅうきょう
天王日月銘三角縁四神四獸鏡

1. 出土地 総社市秦 1653 番 秦上沼古墳
2. 出土時期 1929 年（昭和 4 年）
3. 大きさ 直径 24cm
4. 概要

岡山県内でこれほど大きな鏡の出土例はあまりなく、昭和 12 年には、文部省から重要美術品の指定を受けたこともある。

この形式の鏡は、邪馬台国の卑弥呼が魏の皇帝から賜った 100 面の鏡の 1 面ではないかと考える説もあったが、現在、三角縁神獸鏡は 540 面以上発掘されており、断定できない。この鏡は、サントピア岡山総社南の山腹にある「夢来家」の宮司小橋家に保管されていたが、現在は岡山県立博物館に寄託されている。

8

かなごせきとうづかこふん
金子石塔塚古墳

1. 所在地 総社市秦 873 番
2. 墳 丘 円墳
3. 規 模 直径 約 26 m
4. 主体部 横穴式石室 (石室全長 11.6 m、玄室奥行き 5.5 m、幅 1.9 m、高さ 2.4 m)
5. 埋葬品 須恵器、馬具、武器、金銅製の亀甲文板片
6. 時 期 6 世紀後半
7. 概 要

金子石塔塚古墳は朝鮮半島から伝わった横穴式石室である。石棺の蓋は家の形をしており、材質は井原市波形で産出する貝殻石灰岩である。

この石棺は、こうもり塚古墳、江崎古墳の物と形、材質が類似しており、同盟関係にあったように思われる。

埋葬品の中に「金」を施した冠の一部が装飾品として出ていることから相当の地位の高い人だと思われる。

6 世紀後半の新本川流域の盟主が被葬者と考えられる。

はだてんじんじゃ
秦天神社



1. 鎮座地 総社市秦 2297 番
2. 社 格 村社
3. 御祭神 すがわらのみちざねこう 菅原道真公 (845 ~ 903 年)
4. 祈 願 学業成就・国家安泰・家内安全・五穀豊穰
5. 祭 日 毎年 10 月第 3 日曜日
6. 概 要

天満宮は「天神」(てんじん)、「天神さま」「天神さん」とも呼ばれる。
 社名は、天満神社(てんまんじんじゃ)、祭神の生前の名前から菅原神社(すがわらじんじゃ)などともいわれている。また、鎮座地の地名を冠していることもある。
 政治的不遇を被った道真の怒りを静めるために神格化し祀られるようになった御霊信仰の代表的事例である。道真を「天神」として祀る信仰を天神信仰という。
 道真が亡くなった後、平安京で雷などの天変が相次ぎ、清涼殿への落雷で大納言の藤原清貫が亡くなったことから、道真は雷の神である天神(火雷天神)と同一視されるようになった。



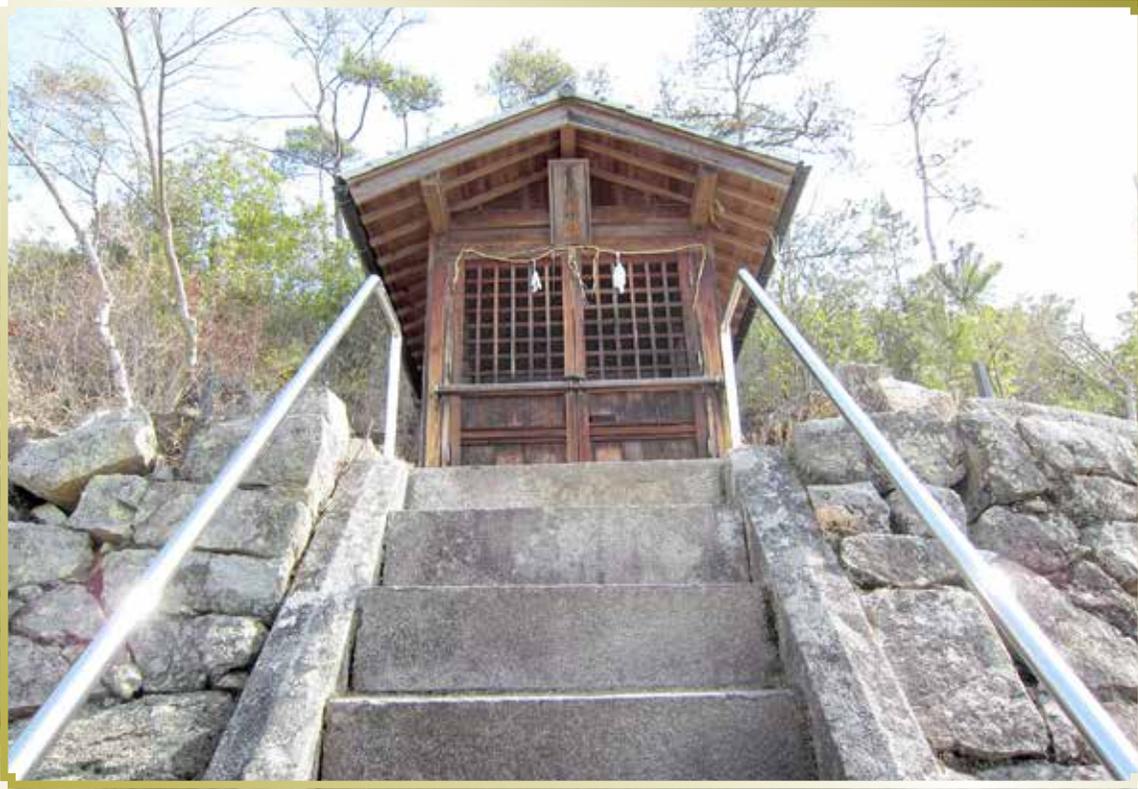
1. 鎮座地 総社市秦 1616 番 (旧秦村大字秦字上沼 1616 番地)
2. 社 格 村社
3. 御祭神 仲哀天皇、応神天皇、神功皇后
4. 祈 願 鎮護国家
5. 祭 日 毎年 10 月第 3 日曜日
6. 概 要

勧請の時代及び次第について、古文書等現存するものがないが、当社は往昔より鎮座の神社として相殿に秦原郷の諸神（八百神（やおよろずのかみ）、妙見宮（天御中主神（あめのみなかぬしのかみ））の二神を奉祀する。

古くは現在の地より村道を登ること三百m程、“野呂の地”に鎮座していた。その地は現在、サントピア岡山総社の裏、正木山を望む地にあり元八幡と呼び、隣地には神宮寺跡もあり、現在、「修験道」の古川寺と分離された頃（元禄年間に）、現在地に鎮座されたものと思われる。

全国の寺の鎮守神として八幡神が勧請されるようになり、八幡神が全国に広まることとなった。

こんぴらじんじゃ
金比羅神社



1. 所在地 総社市秦 2289 番
2. 創建 江戸中期?
3. 御祭神 おおものぬしのかみ
大物主神
4. 祈願 交通安全、稲作豊穰、疫病厄除け
5. 祭日 毎年元旦祭 1月1日（イベント有り）、春祭 3月第2日曜日
6. 概要

大物主神はへび神であり、水神または雷神としての性格をもっている。

海上交通の守り神として信仰されており、漁師、船員など海事関係者の崇敬を集める。神徳は極めて高いとされ、海上交通のみならず、交通安全に関しては日本でも随一の功德を誇るとする声もあがるほどである。高梁川の高瀬舟の安全を祈ることとも関係があったと考えられる。

海運業者や商人によって金刀比羅信仰が日本中に広められた。国の守護神である一方、崇りなす強力な神ともされている



1. 所在地 総社市秦 2783 番地
2. 創建 不詳
3. 本尊 不動明王
4. 宗派 天台宗本山派 修験道
5. 祈願 国家安泰・五穀豊穰・皇室の安泰
6. 概要

天正3年（1575年）火災に遭い、古文書等焼失したため詳細は不詳。（備中兵乱と時を同じくする）

現存する古文書等から推測すると、平安時代後期～鎌倉時代前期頃、倉敷市林の五流尊瀧院（天台宗派の「修験道」の総本山なおかつ、後鳥羽天皇の第四子冷泉宮頼仁親王、第五子桜井宮覚仁親王の御庵室）の末寺であり、開基当時は古川坊と呼ばれ、日本古来の山岳信仰と平安初期に唐から伝来した密教が融合して出来た修験道のお寺である。

当時は神仏習合によるものであったため、幕府や地方領主によって保護され、祈祷寺として栄え檀家を持たない。また、「備中誌」には、古川寺は中世よりの山伏で、「古来古川坊と一山なるべし」と記載されている。寛文7年（1667年）備前領之故還俗して神職と山伏に分離した。

あらひらやまじょうせき
荒平山城跡



1. 所在地 総社市秦 2785 番 27
2. 築城 1429 ~ 1440 年
3. 城主 川西三郎左右衛門之秀
4. 落城 天正3年(1575年)
5. 概要

荒平城は室町時代中期、永享年間(1429~1440年)に築城されたと云われる。天守閣を持たない城で、防御柵と土堀で造った7壇の砦で出来ている。戦時のみの山城で、平時は麓に館があったと思われる。(秦下の平城地区か)

天正3年(1575年)の備中兵乱では城主川西三郎左右衛門之秀は松山城主三村元親に味方した為、毛利軍の攻撃を受けた。伊予部山に陣を構えた毛利軍は、1月17日山麓に火をかけ攻め寄せたが、山は急峻で川を控えた無双の要害で、城兵は石や木を落とすなどし反撃。毛利勢は数百人の死者を出し、後も見ずに逃げ去った。

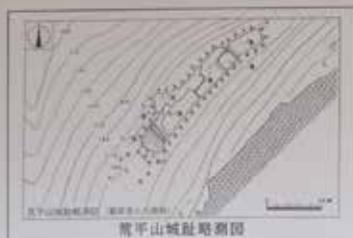
これを聞いた小早川隆景は(小敵と云えども侮る勿れ)と1万5千の大軍をもって総攻撃をかけた。之秀以下城兵300よく奮戦するも多勢に無勢、ついに19日之秀は城兵の助命を条件に降伏し讃岐へ落ちた。

荒平山城由緒

荒平山城は永享年間（一四二九―一四四〇）に地元の豪族、川西氏によって築城されたといわれる。

平時の居館は山裾にあり、戦時の山城と対になっていた。城は尾根上にあり、全長は一五〇メートルにおよぶ。各々の壇には石を使わず土盛のみで整形しており、西の「尼子谷」に井戸がある。

天正年間（一五七三―一五八五）の備中兵乱期には川西氏が三村氏に味方したため、天正三年（一五七五）に毛利方の小早川隆景に攻められた。城兵はよく奮戦したが、城主川西之秀は城兵の助命を条件に降伏、開城し、讃岐へ落ちのびた。これ以降、廃城となったと思われる。



平成三十年三月



秦歴史遺産保存協議会

備中松山城の三村家親は毛利元就と同盟関係にあり、智勇にすぐれ元就も一目置く存在であった。

三村家親は備中国の大半を支配し、永禄8年（1566年）には美作を攻めた。家親に危機感を持った宇喜多直家は永禄9年（1567年）部下に命じ家親を射殺した。後を継いだ元親は同年、毛利の援軍を得て宇喜多を攻めるも敗れ宇喜多に大きな恨みを持っていた。

天正元年（1573年）織田信長によって備後に追放された將軍足利義昭は毛利と宇喜多の仲を仲介し和儀を結び毛利、宇喜多の同盟がかなった。これを嫌った三村元親は信長の誘いもあり、毛利と離反した為に元親に味方する諸城は毛利、宇喜多の追討を受ける事になった。

荒平城主川西三郎左右衛門之秀は元親に味方したため、天正3年（1575年）1月17日小早川隆景の大軍に攻められ1月19日開城。1月23日には山田の鬼ノ身城落城、5月には備中松山城も陥ち、元親の自刀によって備中兵乱は終結した。そのときの三村元親の辞世の句が残されている。

「人という名をかる程や末の露 消えてぞ帰る 本の雫に」

なお元親の子である勝法師丸（8歳）は毛利軍の支配する井山宝福寺に預けられていたが、殺害され、三村家親、元親、勝法師丸の墓が高梁市頼久寺にある。

「秦」という地名の由来

和名類從抄（わみょうるいじゅうしょう）は、和妙抄ともいわれ、平安時代につくられた辞書である。承平年間（931～938年）勤子内親王の求めにより、源順（みなもとのしたごう）が編集した。その二十巻本は、古代律令制度の行政区画である国、郡、郷の名称を網羅する書物としては、最も古い。この和妙抄がそれぞれの地域の「郷名」までを記載している中に、「下道郡秦原郷」（しもつみちぐんはだはらごう）が記載されている。現在の総社市秦は、古くはこの「秦原郷」であった。秦には、飛鳥時代に建てられた秦原廃寺もあるが、秦氏の建てたものと推定されている。また、秦氏は機（ハタ）織りの技術を持って渡来したことから、機は秦に通じるという説もある。

従って、秦という地名は平安、飛鳥時代の（律令制）にまでさかのぼることになる。しかも、秦氏との関係で地名も名付けられたというのが自然な解釈となる。

さらに日本書紀の応神天皇二十二年条の「葉田葦守宮」（はたあしもりみや）の「葉田」も「秦」ではないかと言われている。（岡山県通史）。そしてそこに住んでいた「御友別」（みともわけ）という大豪族は、秦氏であったと思われる。（吉備の古代史事典 薬師寺慎一）

中国の隋書倭国伝という書物は、魏徴（ぎちょう）（580～643年）という著者が隋王朝の歴史を記載したものだ、その中に「秦王国」が日本に存在していたことが明らかになっている。現在、秦王国の所在は、明らかではないが、卑弥呼の存在と同じく、秦氏の栄えた九州説、吉備の国説、近畿説と出てくるだろう。**一丁塚古墳群の30数基の発掘調査は、秦の地名の由来や「秦王国」の存在を立証する可能性もある。全国の古代史研究者や歴史ファンが、かたずを飲んで、総社市教育委員会の発掘調査を見守っている。**

秦という地名が「秦氏」に由来することになると、日本書紀にある「弓月の君」の先祖である秦の始皇帝（紀元前259～紀元前210年）まで関係あることになる。

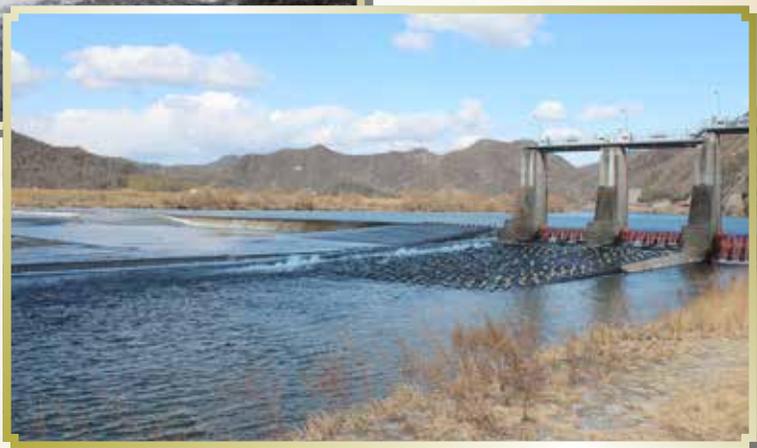
いずれにしても、「秦」という地名の由来は、そのルーツを研究すればするほど、ユーラシア大陸を包む人類の大ロマンとなる可能性がある。（板野忠司）

※ 秦原郷は、現在の秦、神在（上原・富原・下原・八代）及び常盤の中原を表す。

たた い せきじゅう に か ごうようすい
 湛井堰十二ヶ郷用水



昭和27年頃の湛井堰



現在(平成25年)の湛井堰

- 十二ヶ郷用水の起源は平安時代初期といわれている。
- 昔は現在の井堰より約1キロメートル下流の六本柳（通称六本）に井堰があったが川の流れの変化によって、用水の取り入れが難しくなり、平安前期に現在の場所に井堰が造られた。平安時代であることの根拠は、大嘗令和歌集（鎌倉時代）の天慶9年（946年）に「湛井」が出てくること。服部郷図という古代服部地区を描いた絵図に用水路が描かれていることがあげられる。
- 平安末期1182年に、妹尾兼康（平家の有力な家人）によって大改修が行われ現在のような用水になったと伝えられている。これは、京都嵐山の秦氏が桂川に築いた方式と同じという。
- 十二ヶ郷とは、おしかべごう 刑部郷・まかべごう 真壁郷・やたべごう 八田部郷・みわごう 三輪郷・みすごう 三須郷・はっとりごう 服部郷・しょうないごう 庄内郷・かもごう 加茂郷・にわせごう 庭瀬郷・なつかわごう 撫川郷・しょうごう 庄郷・せのおごう 妹尾郷をいう。
- 井堰は、松丸太で作った底枠を川底に沈め川石を詰め、更に上枠を置いて川石を詰めていくという方法で川を堰き止めていった。
- 「最初に湛井堰を築いたのは、高梁川西岸の総社市秦に住んでいた秦氏と考えられる。」（薬師寺慎一「吉備の古代史辞典」）

ちやうすだけ こふん
茶白嶽古墳



1. 所在地 総社市秦 2290 番ほか
2. 墳丘 前方後方墳
3. 規模 墳長 約 65 メートル
4. 段築 前方部は 2 段、後方部は 3 段築成
5. 造出 なし
6. 外装施設 葺石、土器
7. 主体部 竪穴式石室（推定）
8. 時期 古墳時代前期初頭（3 世紀末）
9. 特徴

平成 25 年 9 月に地元の住民により新規発見され、総社市教育委員会と岡山大学考古学研究室により共同調査された。

「茶白嶽古墳と一丁塚古墳は、連続した首長墓と考えられる。渡来系の特徴があり、先進技術を呼び込んでいたのだろう。被葬者は西日本でも目立った存在だったので。」（岡山大学 新納 泉教授）

10. 概要

茶白嶽古墳は荒平山茶白嶽の標高 192 メートルの尾根に位置し、墳丘の頂上には江戸時代より石鎚大権現が祀られている。

墳丘の規模は、前方後方墳として県内 3 番目の大きさで、当地を治めた最初の首長の古墳といえる。



風水古墳

1. 所在地 総社市秦 4000-11 番（地元地区有林）
2. 墳 丘 方墳
3. 規 模 墳長 一辺約 5 メートル
4. 主体部 横穴式石室（推定）
5. 時 期 飛鳥時代（7 世紀末葉）
6. 特 徴

終末期古墳とされ、従来の古墳群から離れ、単独で山頂近くに築かれている。

7. 概 要

飛鳥時代の日本では、都城や古墳の造営に際して大陸から伝わった風水思想が重視されるようになり、この古墳も風水思想で理想とされる地形に築造されていることから風水古墳と名付けられた。

古墳の被葬者としては、風水思想を理解していることから、新しい律令体制で官人に登用されたこの地域の有力豪族が考えられる。

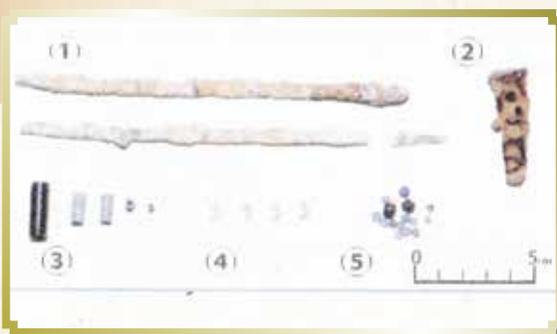
はだ おおぐる こ ふん
秦大圜古墳



奥が後円部

- | | |
|---------|---|
| 1. 所在地 | 総社市秦 1500-2 番地及び 1514-2 番地 |
| 2. 墳丘 | 前方後円墳 |
| 3. 規模 | 後円部 直径約 30メートル、高さ約 5メートル
前方部 長さ約 33メートル、高さ約 4メートル、
最大幅約 17.5メートル、墳丘全長は 62.5メートル |
| 4. 主体部 | 竪穴式石室（推定） |
| 5. 時期 | 4世紀末 |
| 6. 外装施設 | 葺石、円筒埴輪、朝顔型埴輪、蓋型埴輪 |
| 7. 特徴 | |

古墳時代前期に築造された、備中における最古級の前方後円墳と考えられる。前方部 2 段、後方部 3 段に築造され、後円部の西～南側にかけて墳丘保護の基礎固めと考えられる高まりが確認できる。後円部の頂上には、盗掘の跡がみられる。



- | | |
|---------|--|
| 1. 所在地 | 総社市秦 2129-1 番地 |
| 2. 墳丘 | 方墳 |
| 3. 規模 | 15メートル×13メートル |
| 4. 段築 | 2段の石積み |
| 5. 造出 | なし |
| 6. 外装施設 | 葺石、鉋 ^{やりがんな} ②釘 ^{くだたま} ③管玉、小勾玉 ^{しょうまがたま} ⑤ガラス小玉 |
| 7. 主体部 | 竪穴式石室 |
| 8. 時期 | 5世紀 |
| 9. 特徴 | |

同古墳は、規模、形態、石列の特徴から当初は7世紀のものと推測されていたが、調査の結果竪穴式石室が確認され、その形態や出土した玉類から5世紀に造られた古墳となった。



◀▼サントピア岡山総社に
展示されています

秦原廃寺伽藍配置模型(備前焼)1/150 秦歴史遺産保存協議会作成 2018年3月



古代吉備の国ジオラマ模型 1/60,000 秦歴史遺産保存協議会作成 2019年3月

発 行

秦歴史遺産保存協議会
 会 長 板野忠司
 副 会 長 登森康郎、上野信昭
 事務局長 小橋武史
 会 員 数 317名(令和2年1月)
 入会案内
 連 絡 先 上野信昭 0866-95-8155
 小橋武史 0866-95-8156
 改 訂 令和2年1月